

## C 五郎沼と嶋の堂千手観音

### 嶋の堂千手観音

#### C16 観音信仰と三十三所

インドにその源を発する観音信仰は、仏教の東進にともなって中国、朝鮮、そして我が国に伝播し、時代・地域を問わず広く信仰され、庶民信仰を代表するものとなった。

観音菩薩像は、飛鳥時代から造像例があり、8世紀の奈良時代になってその像が急増し、現存する飛鳥時代の仏像の中では観音像が最も多いとされる。

観音信仰の基礎となる教えは、「妙法蓮華経」(全28品)の中の「観世音菩薩普門品第二十五」(観音経)である。この中で観音菩薩が救う相手に応じて三十三に化身(三十三応身)する例をあげ、悩める世間の人々の音声おんじょうを觀じ、慈悲の心であらゆる人々の悩みと苦しみを救い、願いを聞いて安樂を与える仏と説かれている。

我が国の観音信仰は、仏教が伝来した飛鳥・白鳳時代においては、鎮護国家から日常的な至福や除災までを含む現世利益が中心であった。平安時代中頃になると、藤原氏と対立して没落した不遇な貴族たちの間から、現世利益だけではなく、来世利益の信仰としての観音信仰が芽生えた。この時期の観音信仰は、阿弥陀信仰に代表される来世の浄土を求める信仰への橋渡しを担う役割を果たしたといえる。

一般に浄土とは、仏の造った国という意味をもち、阿弥陀如来の極楽浄土がよく知られているが、釈迦如来の妙喜浄土みょうき、薬師如来の淨瑠璃浄土じょうるり、そして観音菩薩の補陀落浄土ふだらくなどがある。観音浄土である補陀洛は、はるか南洋上に存在すると信じられていた。平安時代後期頃から、熊野的那智山が観音浄土である補陀落山と関連づけられ、やがて観音三十三応身説に導かれた西国三十三所の観音巡礼が起こると、熊野詣の盛行の影響下で熊野那智山を1番札所とするようになった。

観音信仰は、時代を経るにつれ武士階級や僧侶のほか、多くの人々に受け入れられていった。観音霊場の巡礼のほか、観音堂への参詣や絵馬・仏具・調度品の奉納などが行われた。観音信仰は仏像だけではなく、地域によって特徴的な信仰も多く、石仏・掛軸などさまざまな形で地域に祀られてきた。例えば、古くから神霊の住む霊地として崇められた岩手山の山頂には、三十三観音の石像が建立されている。また、馬産地である本県では、馬頭観音が馬の無病息災の守り神や馬を供養する仏として、あるいは旅の道中を守る観音として信仰されるなど、最も身近な仏として人々の生業や生活文化と深く関わってきた。